〈資料〉

印人 初世中村蘭臺の書簡

前田秀雄

一

日本近代の篆刻界を代表する印人、初世中村蘭台（安政三～大正四、一八五六～一九一五）の書簡資料を送る。初世蘭台の刻印資料については、二世蘭台の編んだ『香草印譜』正、続、三集(1)によって、代表作のほぼ全貌を俯瞰することが出来る。書幅作品等についてもこれまでに数点発表されてきている(2)。しかし、彼の書簡については、西川寧氏が紹介した(3)西川春洞(4)宛賀状三枚の他に私は知らない。

今回、ここで話題とする書簡群に私がはからずも対面したのは、昭和五十五年の秋、中村淳氏(5)のもとに寄せられた一古美術商からの通報をたよりに行なった山梨探索の折である。現在の所蔵者である小林醇一氏のはからいで、二度目(6)の入峡にて実現した。

西川氏は早くから彼の書簡に注目され、その現存数の少なさを指摘し、また嗟嘆されている。日本近代の書道史の発掘が急がれている昨今にあって、彼のこの書簡は極めて貴重な資料といえるであろう。以下、直ちにこれらの資料の起しにかかりたいのだが、まず、初世中村蘭台について読者の記憶を新しくしておくために、ここで彼の人となり、所業について簡単に述べておきたいと思う。

中村蘭台、名は稲吉、別に蘇香、香草居主人と号した。篆刻は二十代中期から三十代にかけて高田緑雲に学んだが、三十歳以後、師風の追求をやめ、もっぱら明清の各家の風を追い、三十二歳頃より一時徐三庚の刻風に心酔する。その後徐風を離れた一時期を経て、広く漢印や浙派の刻風を学び、最晩年になって彼独自の奔放自在な刻風にたどりつく。彼の所業がこの世界にあって異彩を放つ理由の一つに、彼が石印の他に木印を手がけたことをあげておかねばならない。また、明末以後、印側に款記を記する例はあっても、多くの印人にとって、表現の舞台は印面にのみ限られていた。それに反して、彼の刻技は印面・印側・印鈕と刻印材全体におよぶのである。

西川氏は、「……印は石印のみでなく、木印をやるのが好きで、しかも印側になぐりの様な刀を入れ、鈕を製する。その鈕の技量がただの細工ものではなくて、木質の中に彫りあてたといった味はひ

は美事であった……」と述べている(7)。そして、その技は、木額・肉池・筆筒(8)、果ては欄間(9)や刻看板(10)の大なるものにまで高じていく。この総合的な刻技が、傑出した芸術家・文人趣味的な工芸家としての彼の地位を不動のものにしたといえる。

彼を語る時に、忘れることのできない樋口銅牛の文墨筆暦(11)の一説を、ここで引いておく。

篆を好み、篆を喜び、篆を楽しみ、篆に耽り、篆に淫し、行住坐臥篆ならざるなく、其人遂に篆化せるを香草居主人とす。羲皇以上はしらず、秦漢以上の人たるは疑ふべくもなし。試みにその香草居を訪へ。窓戸几席の間、塵芥もまた篆形を成せるを見ん。況んやその風貌を見、その謦咳を聞くに於いてをや。主人は東京に生まれて(12)東京に人となれり。篆刻は高田緑雲に問へりという。その刀法の奇古凡宿を主とするは黙鳳道人の書法におけるとほぼ相似たり。安政三年生。

彼は江戸末期、会津にて生をうけ、幼年期早々に両親と離別、青年期は養子生活を余儀無くされた。中年期以後、新潟・長野・山梨等の地を旅して歩き、晩年、病臥にふしてからも度重なる転居(13)をしている事実を考えると、生涯過客としての宿運は、すでに出生より憑依していたといえるようである。一人の人間として、決して恵まれたとはいえない彼の生活環境が、彼自ら鉄面(14)と称する性格を作りあげた。彼が遊印として刻した「呼牛呼馬任人呼」(15)などにも、彼が己れ自身を叱咤しながら人生と戦い続けた様子をうかがうことができる。この命を印にかけた苦汁一世の中で培われた彼の資質が、日本篆刻史の上に、恐らく初めにして最後であろう不可思議でなお揺ぎ無い確固たる地位を築いたのである。晩年、帝室技芸員(16)に推挙されながらもその申し出をしりぞけたことなどは、彼の人なりを示したよい挿話であるといえる。

まえおきはこのくらいにして、早速彼の書簡資料に移りたいと思う。まず、この書簡類はすべて彼の愛好家であった小林小六(17)に宛てたものであり、書簡の内容は、依頼刻印等に関する事務的なものが主になっている。保存の体裁は、小六自身が生前に表具屋に依頼して、蘭台からの書簡資料（手紙・封筒・印箋・その他）紙片にして六〇片をアトランダムに巻子軸に仕立てさせている(18)。私の記録によると、巻子軸は桐箱（35・5×10×9 cm）に収められ、箱の側面の覚書には、筆者、中村蘭台先生／書題、書簡其他、巻物／甲府向栄堂製とある。封筒はすべて開き、表裏を一面にして表装される。消印にて紀年の確認できるものの上限が明治三十六年十一月十七日付(19)、下限が明治四十五年三月三十一日付(20)。彼四十八歳から五十七歳頃の約十年間に送られたものといえる(21)。

書簡を通読すると、当時の彼の生活や人なりを知る手がかりを見いだすことが出来る。彼は生涯を通じ二度にわたり中風を患っているが、一度目の発病がいつなのか、明確な期日を示した記録はない。手の自由を欠くこの病が、作風に大きな影響を与える点で、作品を分析していく上にも常に問題にされる。今まで、一般的には明治三十八年、五十歳頃と推定されているが、本件11の書簡によると明治三十六年、四十八歳頃にはすでに発病していた形跡がある。同時に山梨にて療養生活をしていた事実も浮ぶ。書簡はこの他に、窮乏生活をしいられながらも常に第一級の生活を求めた、彼の文人趣味的な一面や、彼自身が語る性格、彼の刻印の代価など、さまざまなことを伝えている。

書簡の提示にあたり、この巻子軸には、一組の書簡を、封筒・手紙の順に配列した様子があるので、巻首から順に一紙ごとに通し番号を付し、書体や書風、形式から推測して、封筒と手紙を一対にする作業を行なう。次に再び、巻首から書簡番号を付す。それによると、2・8紙片については、対になるべき封筒がない。一つの封筒に二紙入っていたことと推定し、前後の書簡との対を試みるが、2は書簡1・3のどちらとも期日が合わない。また、8は春聯を書いたもので、書簡7に属する可能性は高いが、明確な根拠はない。そこで、2・8については、単独に番号を付すことにした。以下、この整理番号により、小林小六宛書簡1～31を掲載する。

当初、書簡を紀年順に配列整理することも考えたが、紀年の明確なものが全体の三分の一であり、未だ年代決定をする資料の乏しいこと、また、この書簡巻子軸の資料的価値を重視し、今回あえてこの形で提示することを御理解いただきたい。

(1) 正集（大正九年刊）、続集（大正十年刊）、三集（昭和四年刊）。

(2) 『書品』一六二・一六八号。

(3) 『書品』一六二号。

(4) 弘化四～大正四年（一八四七～一九一五）。書家。西川寧氏は子息。

(5) 現在日展会員。二世蘭台の子息。

(6) 一度目の小林宅訪問の折には未見。その後、氏からの連絡を受けて入峡した。

(7) 『書品』五一号。

(8) 『書品』一六二号。

(9) 長野市、犀北館に欄間図あり。『書品』五二号に「……焼けた向島の私（西川氏）の家の欄間には、霊芝雲に古銭をふくんだ蝙蝠をあしらった図案をすかし彫りにしたものがあった……」とある。

(10) 内藤香石氏（山梨在住の篆刻家）によると、甲府の旅館竹屋、呉服屋内藤、呉服屋岡島に幅二尺・長さ一丈ほどの欅材刻看板あり。甲府の三看板といわれていた。現在は焼失。

(11) 明治四十四年から五年にかけて、七十二人の文墨人に七十二候の印を刻させて、朝日新聞に連載した。蘭台の「王瓜生」の三字印の下につけられた解説による。

(12) 『書道』（刊号不明）に載る鹿児島二橋「蘭台と寒山」に「……翁の出生は東京と言われて居るが、余の仄聞するところによれば会津藩士の家に生まれ幼年父なる人を失ひ……」とある。また、中村濱氏（二世蘭台夫人）、初世夫人やすより聞き覚えたところによれば、「父は会津若松藩の須合（不明）という家老だった……」という。現在、中村淳氏も福島出生の説をとっている。

(13) 『書品』五一号。

(14) 本件、書簡15。

(15) 『香草印譜補遺』載録。

(16) 現在の芸術院会員。

(17) 山梨在住の銀行家。没。

(18) 小林醇一氏談。

(19) 本件、書簡11。

(20) 本件、書簡30。

(21) 彼、四十七歳頃から卒年までの足跡については『印界時報』大正九年刊カ（新潟で発刊された印章関係業界紙）、『新潟新聞』大正六年十月三十一日記事や、彼の旅記により概要が知れる。この時期に諸県を旅して歩いた足跡が記録としてのこされている。

(22) 二度目の病臥についても定かではないが、『新潟新聞』（注21参照）で藤井致堂氏が「……確か明治四十五年即ち大正元年の歳に、東京へ出て何かの拍子に蘭台を想起し、浅草代地の居を訪ねると、当時は中風症で体は見る影も無く衰えていたが元気丈けは依然旧の如くで……」と語っていることから、大正元年、五十七歳にはすでに発病していたと考えられる。

二

例　言

一、書簡文面の翻刻に当っては、大略次の方針に従った。

○異体・略体字は新字体に改めるのを原則としたが一部は原文の表記に従った。

○仮名づかいは原文に従い、送り仮名も原文のままとした。

○句読点は適宜にこれを付した。

○斜線「／」によって原文の改行位置を明示した。

○不明な字は□を以って表わし、注で疑問の残るものを（□？）によって示した。

○誤字と思われるものには傍にママを以って示した。

○見せ消ちは傍点・を以って示した。

一、封筒・書面の寸法は（　）に縦×横の順に掲げた。単位はcmである（但し、封筒は表裏を一面に開いた形のものである。）。

一、書簡は主に墨書によるが、朱筆のものにのみ区別を示した。

一、用印については、朱・白文印の区別と、「　」に釈文を付した。

1　封筒（14×12・2）

（表）小林様　中村蘭台（朱文印）「香草居主」

（朱刷下絵）

賜福（1）戊子冬十／月下浣／一言主人／属起稿／居士題（朱文印）「（不明）」

（裏）十二月十八日（朱文印）「香草居主」

書面（13×24・2）

兼て御配慮ヲ煩候／外套用布出来／小沢君今朝態々持／参候。就てハ毎々／恐縮々有之候得共／別紙（十二弐四十五（銭カ）□）ノ全額御立／替ほき被下度奉希候。

中村蘭台

小林盟台（2）侍史

十二月十八日

2　書面（28・3×7）

拝啓　益々御健勝奉賀候。然ハ来月転居仕度付テハ金三百／四十円斗リ不足ニ付兼テ御覧被下候彫刻ノ屏風ヲ差上候／間此金御用立被下間敷候哉。此段御伺申上候。希クハ至

急／御返事ヲ玉ら ハ大幸ニ有之候。右御願まで。草々　頓首

小林高雅盟台侍史

中村蘇香□□□四月廿六日

3

封筒（21・1×15・5）

（表）北巨摩郡韮崎（3）

小林小六様侍史

（裏）甲府柳町一丁目木村屋方ニテ

中村蘭台

書面（16・1×44・5）

拝啓、然ハ入院中ハ度々／御見舞被下御厚情奉／多謝候御蔭ヲ以テ漸々／快方ニ赴き去十五日退／院、表記之所へ一ト先引／上け静養罷在候ニ付／御出峡ノ御序も被存在候／ハハ／御枉車被下度奉祈候。書余／拝芝万謝々々草々　頓首

御本家様幷ニ／百瀬君／保坂両君及旧知諸／君子へ宜ク御伝言伏テ／奉希上候再拝

中村蘭台頓首

小林様侍史

八月十九日

4

封筒（朱筆）（20・4×15・4）

（表）竹屋様方ニテ

小林様侍史（朱文印）「香草居主」

（裏）幽静館ニテ　中村蘭台拝（朱文印）「香草居主」

○（封印）（朱文印）「香草居主」

書面（朱筆）（16・2×24・2）

昨日ハ甚御粗末／御免下被下候／屏風昨今佐竹君より／とりに参り候に付、此ものへ／御わたし被下度希候。

中村蘭台拝

小林盟台侍□（史カ）

竹屋主人へよろしく

5

封筒（20・8×15・5）

（表）小林様侍右（朱文印）「香草居主」

（裏）九月二日　中村蘭台拝（朱文印）「香草居主」

（封印、朱文印）「（右と同印カ）」

書面（17・2×22）

昨夜廿五円拝受／難有奉鳴謝候／余は拝□上（社カ）

中村拝□（寄カ）（朱文印）「香草居主」

小林山川盟台（4）侍史

6

封筒（14・5×13・2）

（表）横浜市十全病院／特別一号室内（消印）「明40・4・5」

小林小六様台啓

中村蘇香拝寄

（裏）東京浅草西鳥町弐番地（消印）

書面（23・4×7）

拝啓貴恙其後の御容体如何ニ被為在候哉。尚天候／不順の時節柄別シテ御保養可被遊候／兼て御届けの印篆訳文落款不残出来上リ申候内六枚は続き／蘇東坡賞心十六事（六枚）外十六枚は遊印にて続きものに無之／故一葉ツヽ幅ニいたし候てもよろしきものに御座候／先は御見舞かた〳〵御報知申上候。草々　不一

中村蘭台拝

四月六日

小林高雅侍史

（朱刷下絵）

永寿年　福漢甎／文曰永寿／年、磊安為／文美主人□

（朱文印）「文美」

7

封筒（20・7×15・8）

（表）横浜市十全病院ニテ（消印）「明40・3・31」

○病室不詳

小林小六様台啓

三月卅一日寄

（裏）謹封　東京浅草西鳥越町弐番地　中村蘇香

書面（23・3×9）

拝啓御病気候被存在候由、其後の御経過ハ／如何ニ御座候哉。兎角気候不順に有之／候ゆへ、切角御大切御養生専一に一日もはやく／御退院被遊候様、偏ニ奉祈候。先は御見舞／まて。草々　敬白

中村蘭台拝

小林高雅侍右

三月卅一日

8

春聯（24・2×16・3）

春聯

四時和気春長在／一世安閒楽有余

瓦当文延年益寿／銅盤銘富貴吉祥

9

封筒（20・4×15・3）

（表）小林様台啓

（裏）○（封印）（朱文印）「練習未除」　中村拝

書面（15×15）

記

一金八十五円也／右正に受取申候。

中村蘭台（朱文印）「練習未除」

小林様　九月卅日

10

封筒（19・5×14・8）

（表）韮崎町　（消印）「明□（35カ）・11・23」

小林小六様台啓（この行朱筆）

（朱文印）「香草居主」

（裏）〆（封印）（朱文印）「香草居主」

[redacted]

書 簡 1

[redacted]

書 簡 24

[redacted]

簡　書　7

[redacted]

封　筒（書簡 20）

甲府幽静館内
中村蘭台頓首（朱文印）「香草居主」
十一月二十二日夕

書面（朱筆）（24・1×17・1）

記

一金拾円正ニ受取申候。
中村蘭台（朱文印）「香草居主」
小林様　十一月廿二日

11

封筒（19・7×15・2）

（表）甲府市相生町竹屋旅館ニテ（消印）「明36・11・17」
小林小六様台啓
韮崎恵ひすや(5)方中村蘭台拝
（朱文印）「香草居主」
（裏）十一月十七日（封印、朱文印）「香草居主」
（朱文印）「香草居主」

書面（21・2×49）

拝啓益御健勝奉賀候／然ハ永々の病気も御地へ／罷越の御蔭ヲ以テ、漸々／快復千万難有奉深謝候／扨御届の品ニ犯して不残／出来上リ候ニ付、一ト先帰京／仕度候。何分宜ク奉希上候／書余期　拝芝候。
中村蘭台頓首
山川園主高台／侍史　十一月十七日

12

封筒（19・4×15・6）

（表）横浜弁天通三
鹿嶋屋旅館（消印）「明40・4・26」
小林小六様台啓
丁未四月念五発
（裏）小林君御帰国ニ相成候ハハ御本宅附御回送被度存候／
鹿志まや様
東京浅草西鳥越街弐番地　中村蘇香

書面（27・3×13・7）

金壱百元也
右正ニ拝受奉鳴謝候。書余／拝顔万々頓首
中村蘭台
小林盟台侍右　四月卅日

13

封筒（22×15・7）

（表）北巨摩韮崎
小林小六様台展
四月初五日
（裏）甲府幽静館内　中村蘭台拝

書面（28・3×16）

一昨日御帰宅の由昨日は旅館へ拝訪承知仕候／然ハ先日尊

来の節又々〇〇願上候処早速御承諾被下／感佩に不堪候。付テハ反ものの代ヲ払ひ早速ニ服に仕立させ度／けふに入候得共可成至急〇〇御送付奉願候。花瓶二十円／箱を五円とシテ二十五円賜リ度奉悃願候。早々　頓首

中村蘭台拝

小林様御中　四月五日

過日ハ黒谷君へ屏風御見せ被下御厚情／奉謝候再拝

14

封筒（26×15・7）

（表）相生町旅館竹屋様方

小林小六様侍史

（裏）四月廿七日

静幽館ニテ　中村蘭台拝

書面（18・7×33・7）

久々にて明朝御地へ御伺ひ可申上心得候テ／今朝小沢氏方迄通知致しおき候得共、好天／気故或は角力御見物ニ御出峡もと存在／候哉ト午時頃使ヲ以て竹屋旅館ヲ被伺候処／悉察通リ御出峡被存在候由候ニ付／先刻御旅館ヲ訪ふ心得ニテ有養堂／前迄罷越し候得共、眩暈何分歩行に／堪兼候ニ付折節通行ノ人車ニテ帰宅遂々不被伺／遺憾ニ奉存候、眩暈は或は午後俄の／暖気に猶又雨催し故病人には殊に／感し易きものと存候。帰宅後は氷ヲ／融又頂き静養いたし居候実は／拝顔の上御相談仕度事有之候得共／大口次第故何分伺ひ兼候間甚以テ／恐縮テ万ニ有之候得共、御散策ノ御序御立寄被下候ハハ難有仕合ニ奉存候。

中村蘭台拝

小林盟台侍右

四月廿七日

15

封筒（22・5×18）

（表）北巨摩韮崎町

小林小六様台啓

（裏）十一月廿二日

甲府幽静館内　中村蘭台拝

書面（23・7×27）

拝啓一昨日御尊来不相変失敬御ゆるし可被下候／其節御厚情ノ御言葉ヲ玉リ候得共、鉄面に申上兼候／躊躇罷在候、然ルニ昨日殊更小沢氏御遣シ被下候ニ付／御言葉ニ甘へ願出候処早速弐十円御用立被下／感佩餘りあり候、此金ヲ以て衣類新調スル心得にて／間合申候処はおり其外にて予算額より上り不残／揃ひ兼候間、甚恐縮千万ニ有之候得共、今三十円／御用立被下度小沢氏両三日中に再び出府ノ由同氏／ヲ以テ御ととけ被下度伏て奉懇願致候。頓首

中村蘭台拝

小林様侍史

十一月廿二日

16

封筒（20×15）

（表）横浜弁天通リ（消印）「明40・3・27」
鹿嶋屋旅館ニテ
小林小六様台啓
（裏）三月廿六日
東京浅草西鳥越二　中村蘭台□（拝カ）

書面（23×12・7）
拝啓過日御尊来の処甚御粗末、大ニ失礼仕候。扨、御扈の晶印落成仕候ニ付印影／備貴覧候、此印普通水晶よりも性質二倍もかたく殆ンド玉の如ク／彫刻大ニ困難ヲ極め候ニ付、此料廿円頂戴仕度く候。印材は直接／先方へ護封郵便小包にて奉送可仕ヤ、或は小生印材ヲ携帯／出港御伺ひ可申上候ヤ。且又近日御序、御出京蝸廬（6）へ御立寄被下候ヤ、伺ひ候。／月末不相変の文なし刻料御立かへ被下候はは幸甚々々。彫刻／の屏風御思召ニ従ひ候はは、先年病中種々御厄介ニ相成候故潤筆／料無思召シニ御仕せ可申候。万一御思召しも無之候はは、いつれへなり／御相識の好事家へ甚恐入候得共御周旋被下度偏ニ奉希候。／其資ニテ適宜ノ家ヲ撰ミ（ヽヽ）転宅仕度候間、何分宜ク御／尽力迄被成下度此段奉願上候。甚恐縮ニ御座候得共貴答／玉リ度候。頓首
中村蘭台拝
小林高雅侍史　三月廿六日

17
封筒（14・5×13）
（表）藤田君雅属

朱文水晶印一枚
蘇香生所作丁未（7）四月

書面（16・8×11・5）
水晶印文曰胸太郎　並従古文
（朱文印）「胸太郎」
丁未四月　蘇香生作

18
封筒（26×15・8）
（表）小林様侍史
（裏）十一月廿一日　中村蘭台拝

書面（19・7×14）
記
一、金参拾圓也／右拝受奉鳴謝候　頓首
中村蘭台
小林盟台
十一月廿一日

19
封筒（21×15・6）
（表）竹屋旅館ニテ
小林盟台大人侍史
幽静館内ニテ
中村蘭台拝
（裏）四月廿八日

書面（18・3×24・2）

拝啓／御帰宅前ニ得／拝顔度候。小生ハ昨日より／快ク候ニ付、御当所も不／被存在候いかか奉伺候／不得此のものへ貴答／奉希候／頓首

中村蘭台拝

小林盟台侍右

廿八日

20

封筒（20・4×15・3）

（表）横浜弁天通三　鹿嶋屋旅館

小林小六様台啓

中村蘇香　東京浅草西鳥越町二番

（裏）護。封。（上下）明治四十年四月十二日

書面（21・4×10）

藤田君、晶印御郵送可仕候ニ付、刻料二十円御送リ／被下候様、御本人へ御通知賜リ度候。御序、此印影／御送リ被下度候。且、御為換候。浅草局ハ遠方なれは／近傍元鳥越郵便局へあて御差出し被下候様／御伝言奉希候。先ハ貴答迄。草々　頓首／中村蘇香拝

四月十二日

小林高雅盟台侍右

御病後尚御大切ニ奉祈候得共再拝

○様子知ラサル方ハ刻料二十円ニ驚キ可申候ニ付、甚恐入候得共／御伝言ヲ煩ス次第二有之候。

21

封筒（19・2×14・7）

（表）小林盟台侍右（朱文印）「香草居主」

（裏）○（封印）（朱文印）「香草居主」

十一月廿三日

中村蘭台拝（朱文印）「香草居主」

書面（17・9×8・2）

久々御無心申上候処、早速小沢氏ヲ以テ／態々御もたせ被下テ万難有奉鳴謝候／蕎麦粉（弐拾元）即座ニ風味仕候、流石新粉丈ケニ／香気も別段結構ニ頂戴仕候、書余／拝芝　万々ニ奉謝候。

中村蘭台頓首

小林盟台侍右

十一月廿三日

22

封筒（20・8×15・7）

（表）竹屋ニテ

小林小六様（朱文印）「香草居主」

（裏）四月二日（朱文印）「香草居主」

幽静館ニテ

中村蘭台拝

（朱文印）「香草居主」

書面（24×32・3）

昨日□（一）御覧候反物、先刻持主しより／如何ト申参候ニ付、

もとめる約束仕候間／今日ニハ不限候ニ付、御都合候テ代金ヲ／先方へ遣し候。時分のものニいたし早速／仕立させ度、甚々御迷惑とは／察し候得共、何分宜敷奉希候／且又、屏風を黒谷君へ御見せ／被下候哉、如何。いつれ明日、快晴なれハ／参館の上。万々　頓首

中村蘭台拝

小林盟台侍史

尚々、又々、談露館より屏風／とりに参り候ニ付、御手元ニ有之候ニハ此使へ御わたし被下度／奉希候。

再拝

23

封筒（19・6×15）

（表）韮崎

小林様台啓

木印二枚相添

甲府／幽静館ニテ／中村蘭台

（裏）謹封（朱文印）「香草居主」　十二月卅一日

書面（17・6×23・2）

拝啓先日ハ欠礼奉謝候、然ハ／其翌十三日、高森砕巌（8）ノ所へ／序テ有之候ニ付、話シ置候、又小生鉄筆会（9）へ御賛成被下難有奉／謝候。就テハ額一面、落成仕候ニ付／近日御送リニ申上ト存候。明神ノ御宅へ横浜御滞在ヲ伺出候処／六七日前、御帰リニ相成候ヨシ／残念ニ有之候。右額ノ語ハ永受嘉福ト彫刻イタシ候。鉄道／先払ニテ差出ニ（候カ）付□□（得カ）様御知被下／度候。代金ハ可相成ハ、早々御手数ナカラ／御送り被下度、奉希候。

小林様　　中村蘭台　（朱文印）「市隠」

24

封筒（23×15・5）

（表）小林盟台台啓

中村蘭台拝（朱文印）「香草居主」

書面（23・9×32・2）

先刻は又悪々御（拾円）もたせ被下難有／奉拝謝候。今朝相願ひ候金額だけ／希クハ御用立被下度伏テ奉祈候／□（然カ）拝受の外ニ、今二十円御願中度／余下鉄面皮の到ニ有之候得共／只今依頼せぬと一月（年内の中ニ費地へ伺ふニ間ニ合）／ニ合不申候故、御厚志ニ甘へ／右懇願奉リ候。

頓首

中村蘭台拝

小林様侍史

十一月廿二日／午後三時

25

封筒（18×19）

（表）朱文水晶印一枚

○（朱文印）「小林」（10）

（裏）癸卯五月中澣

蘭台仿鐘鼎文字

紙片（23・7×20・8）

氷玉印一枚

蘇香生作

26

封筒（13・7×12・6）

（表）印景

（朱刷下絵）

賜福　戊子冬十／月下浣／一言主人／風起蕭／居士題

（朱文印）「（不明）」

紙片（17×21・4）

（朱文印）「胸太郎」

右水晶印文曰胸太郎／丁未三月廿有三日　香草作

（朱文印）「難興俗論」

27

封筒（20・1×15・4）

（表）甲斐韮崎

小林小六様

至急平安（朱文印）「市隠」

（裏）東京浅草旅籠二ノ一

中村蘭台拝（朱文印）「市隠」

三月七日

書面（18×19・3）

可相成ハ砕厳ヘ／可送潤筆料モ御序ニ／願度奉存候／再拝

蘭台（朱文印）「市隠」

小林様

28

封筒（20・2×14・9）

（表）小林様台啓　／中村蘭台拝

（裏）十月四日

書面（15・1×66・5）

香煙受出しの金額／の内三十円、昨、田村(11)不幸／の為に東京へ郵送／火急の場合遣／尊君ニ一応の御話し／も不仕所計候段、何共／恐縮の到、不悪御仁免／奉祈候付テハ明日又々／保坂君も用事ヲくり／あわせ甲府へ同道／致呉、御約束ニ相成罷候／ニ付、明朝甲府へ罷越し度／此義昨夜小沢氏ヲ以テ／願出候筈の処□(然カ)以て何／共同氏より返事も無之／故ニ只今まちかね同氏／のところへ聞合せ候処／今朝（ムカワ）トカ申所へ／被参不在ニテ一向要領／ヲ得ズ候、依テ甚失礼／とは御座候得共／右御承諾被成下候哉／如何奉伺上候／可相成ハ明日の約／束ニ付、罷越し度／御都合尚奉伺候。

（不足金）

十月四日　／頓首

中村蘭台拝

山川高台侍史

山川園扁額(12)着／手致候為御寸暇可懸／御読被下度希候。

29

葉書（14×9）

（表）甲斐韮崎

小林小六様
東京浅草旅籠二ノ一
中村蘭台拝
（消印）「明45・3・15」
（裏）拝啓今日運送へ鉄道／便ニテ奉送仕様依托仕候／御多
珎印譜ヲ購フ約束／仕候ニ付、御多忙の処甚／恐入候
へ共、近日早々会費十五円／御送り被下度、奉希候。
今日保坂／君一寸御立寄　　三、十四

30
葉書（14×9）
（表）甲。甲斐、韮崎
小林小六様
御執事御中
三月卅日
（消印）「明45・3・31」
（裏）拝啓益々御壮健奉賀候、然ハ／去ル三月十五日差出候
扁額／□二枚最早御落掌ノ事ト存候／御主人御旅行中
申上兼候へ共甚ダ／困却致候ニ付て然御取斗被下／至
急御送金ニ預リ度、偏ニ奉希候。
中村蘭台鉄筆会
事務所　○東京浅草／旅籠二ノ一
伏。祈ノ回音ヲ一

31
絵葉書（14×9）
（表）甲斐韮崎

小林小六様
東京浅草旅籠二ノ一
中村蘭台／鉄筆会事／務所三月十九日
額面一枚／去ル十五日／鉄道便／ニテ奉送仕候／御落
手ニ相／成候ハハ早々／代金十五円／御送り被下度／
奉願上候／頓首
中村蘭台拝　（朱文印）「大吉羊」
（消印）「明□(45カ)・3・20」

（裏）（蘭台作扁額写真・省略）
蘭台作（朱文印）「大吉羊」

（1）上段に大きく「賜福」の籠字をおき、下段は五行、木版刷りか。書簡26も同一。
（2）小林小六の号。
（3）現在の山梨県韮崎市。
（4）小林氏は山川園主という号を使用した。
（5）当時は旅宿だったが現在は寿司店。二世刻扁額がある。
（6）蘭台の室名。
（7）明治四十年（一九〇七）。
（8）弘化四～大正六年（一八四七～一九一七）。画家。彼は他に、横山大観、河合玉堂、寺崎広業などの画家達とも広く交遊があった。

(9) 鉄筆とは印刀のことで篆刻のことを示す。篆刻の研究会を主催したものと思われる。

(10) この印は現在小林醇一氏蔵。

(11) 妻やすの実家。やすは山梨県一宮町出身。

(12) この額は現在小林醇一氏蔵。

本件書簡資料掲載にあたり、書簡の所蔵者である小林醇一氏には発表の御快諾を賜わった。ここに深く謝意をささげたい。

（まえだ　ひでお）